

カトリック修道女会による明治期の孤児救済活動

L'aide sociale pour les orphelins à l'époque Meiji
faite par les religieuses de l'Église catholique

菊地章太
KIKUCHI Noritaka

要旨

キリスト教禁教令が解除された明治初期の日本において、カトリック教会からはパリ外国宣教会が最初に布教に携わった。宣教会の要請のもとに多くのシスターが来日する。これはイエズス会やドミニコ会などの修道会が布教したキリシタン時代にはなかったことである。復活した信仰の地では布教はもとより、教育や福祉の分野における活動が期待された。そこには女性でなければできないことも数多く存在した。孤児救済事業の実践はそのひとつである。1872年（明治5年）以降、フランスに本部を置く3つの修道女会があいついでシスターを派遣してきた。サン・モール修道会、ショファイユの幼きイエズス修道会、シャルトル聖パウロ修道女会がそれである。

フランスのシスターたちが東の果ての国で一生をかけて孤児救済に携わった。その活動を支える根底には、近世以降のヨーロッパ・カトリック教会において形成された社会福祉の理念がある。宗教改革を経た16世紀以後のヨーロッパには、社会のなかで奉仕活動を行なう新しい修道会が続々と現れた。そこでは俗世のただなかに立って布教と教育と福祉を実践していくことが目標とされ、さらに在俗信者の役割が開拓されていく。教会という枠を越えて現代の社会福祉につながる道が切り開かれたのである。シスターたちが異国の土となるまで孤児救済の実践に携わったことも、出発点はここにあったと言えよう。

なお、本文中に出てくる「孤児」や「みなし子」という言葉は、現在は児童養護の領域では使用されない。しかし本稿はその歩みを古い時代にさかのぼってたどる試みであり、当時の資料にこうした表現が出てくるため、あえてそのまま用いることにした。差別の助長を意図するものではないことをご了解いただきたい。また、ここでは上記の修道会の活動をヨーロッパ側の資料と修道会内部の資料をもとに叙述することをめざしており、同時代の日本における世俗社会の資料は参照していない。これは今後の課題とすべきであることをはじめにお断りしておきたい。

キーワード：カトリック教会 サン・モール修道会 ショファイユの幼きイエズス修道会 シャルトル聖パウロ修道女会 孤児救済

1. 明治期におけるカトリック教会の活動の再開

キリシタン時代に日本という土地に蒔いた信仰の種はもはや途絶えてしまったのか。— 19世紀のヨーロッパ・キリスト教会はそのように考えていた。もう一度種を蒔かねばならない。いつかその機会が訪れることを宣教師たちは待ち望んでいた。それは中国でも朝鮮でも同じような状況だった。

アジアへの再布教はパリ外国宣教会 Missions Étrangères de Paris が担うことになる。これはイエズス会のような修道会ではない。司祭によって構成される団体である。1664年に司祭養成のための神学校がパリに創られ、ローマ教皇によって宣教会として認可された。それからアジア各地への宣教活動が開始される。

パリ外国宣教会は教皇庁の委託を受け、香港を拠点として日本への渡航を企てた。1844年にフォルカード神父 Théodore-Agustin Forcade はフランス海軍の軍艦で那覇に上陸した。日本再布教をめざしてここまでたどり着き、教皇庁から日本代牧に任命された。司教区に認定されていない教区で教皇の代理を務める者を代牧と呼ぶ。神父是那覇に2年のあいだ滞在し、ここを足がかりとして日本への渡航を試みようとしたが果たせなかった。

プロテスタントも日本布教に乗りだした。1846年にイギリス聖公会宣教協会の宣教医師ベッテルハイム Bernard Jean Bettelheim が同じく那覇に赴いて布教に努めた。こちらも8年あまりの奮闘のち香港にひきあげてしまう。しかし彼が那覇を去るまえの年、1853年にペリーが浦賀に来航していた。日本は開国へ向かって進んでいく。58年に日米修好通商条約が結ばれ、ついでオランダ・ロシア・イギリス・フランスとのあいだでも条約が結ばれた。フランスは諸外国にならって横浜、長崎、箱館(のちに函館に改称)の開港を求め、居留地内での教会と墓地の設置を認めさせた。

横浜に開国後最初の教会が建てられ、聖心聖堂と名づけられた。現在のカトリック山手教会の前身である。1862年のことだった。日本の年号では文久元年にあたる。この年、パリ外国宣教会からプティジャン神父 Bernard Thadée Petitjean が横浜に派遣された。翌年には長崎に移っている。1865年(慶応元年)、長崎に大浦天主堂が完成した。明治維新の3年前であった。ここで世界中の信者を驚かせたキリシタンの復活が実現したのである。しかしキリスト教の禁制はいまだ解かれていない。長崎奉行による一斉捜索が行なわれ、潜伏していた信者が検挙された。プティジャン神父はただちにヨーロッパに向かった。ローマ教皇にこの次第を報告して援助を求めたのである。しかし徳川幕府にはもはやそれ以上の追求を重ねる力はなかった。代わって明治新政府が弾圧に乗りだした。

いったん日本に戻った神父は1869年(明治2年)に第一ヴァチカン公会議に出席するため再度ローマへ赴いた。その最中に新政府による信者三千三百人あまりの捕縛を知らされた。日本へ帰り着いたときには西日本各地への配流処分が決まっていた。この弾圧に対して駐日外交団からの抗議があいついだ。不平等条約の改正をめざす使節団が欧米諸国に派遣されていた時期である。来訪した先々で非難にさらされ、改正交渉はまったく進展しない。新政府はキリスト教徒に対する処置を緩和せざるを得なくなった。信者は配流先で辛酸をなめつくしたのち、ようやく帰還を許されるようになる。1873年(明治6年)に禁制の高札は撤去され、信教は黙許のかたちになった。

そのまえの年、プティジャン神父はシンガポールにいたサン・モール修道会 Sœurs de Saint Maur のメール・サント・マティルド Mère Sainte Mathilde に手紙を書き送っている。キリスト教の禁制

が解かれるきざしが見えてきた。すぐにこちらへ来るようにとの依頼である。メールはパリの修道会本部の許可を得て、4人のシスターとともにシンガポールの港を出航し日本に向かった。

フランスの修道女会では集団の年長者を母と呼んだ。サント・マティルドの本名はマリー・ジュスティヌ・ラクロ Marie Justine Raclot である。18歳でサン・モール修道会に入会し、そのとき授けられた修道名がサント・マティルドである。日本ではメール・マティルドと呼ばれているので、ここでもそれに従いたい。後述するとおりサン・モール修道会は通称であり、現在は「幼きイエス会」Congrégation des Sœurs de l'Enfant-Jésus と呼ばれる。

復活した信仰の地で、布教はもとよりのこと、教育や福祉の種を蒔いて育てていく。女性でなくてはできないことがたくさんある。開国後の日本には宣教師が来ただけではない。多くのシスターがやって来た。これはキリシタン時代にはなかったことである⁽¹⁾。

フランスに本部を置く3つの修道会があいついでシスターを日本に派遣した。サン・モール修道会、ショファイユの幼きイエズス修道会 Congrégation des Sœurs de l'Enfant-Jésus de Chauffailles、シャルトル聖パウロ修道女会 Congrégation des Sœurs de Saint Paul de Chartres である。このうち最初に日本に来たのがサン・モール修道会だった。一行はその年1872年（明治5年）6月に横浜に上陸した。日本の土を踏んだ最初のヨーロッパ人シスターとなったのである。マティルドはこのとき58歳になっていた。

メール・マティルドは横浜に到着した次第をみずから記している⁽²⁾。シンガポールから香港をへて日本に向かう途中で嵐にみまわれた。二日間死にそうな思いをしたが、ようやく海は静まった。船は台湾海峡をぬけたあと、日本をめざして右よりの航路を進んでいく。やがて船の甲板から陸地が見えてきた。マティルドは記した。「北の方、遠くに望む長崎の山々に向かって私たちは挨拶しました。かつてこの頂きのひとつで十字架にかけられた聖なる殉教者を思うとき、私たちの胸は熱くなりました」と。

殉教者というのは二十六聖人のことである。安土桃山時代の1597年に豊臣秀吉の命令で捕らえられたキリシタン26人が長崎で処刑された。ヨーロッパ人の神父と修道士が6人、日本人の信者が20人、そのなかに子どもも3人いた。彼らの殉教のようすは当時の宣教師の記録によってヨーロッパにも伝えられ、ずっと信者の崇敬を受けてきた。それから三百年、ときあたかも1862年にヴァチカンで彼らの列聖式が行なわれたばかりである。大浦天主堂もこの二十六聖人に献げられている。

船はさらに東へ進み、翌々日の朝早く横浜に入港した。

すでに日本代牧司教に就任しているプティジャンは司教座を横浜に定めていた。司教に遣わされた宣教師がふたり港に迎えに来た。5人のシスターは日本の土を踏みしめた。感動で胸がいっぱいになり、誰もが押し黙ったまま教会へ向かう道をたどっていく。正装したプティジャン司教が教会のまえで待っていた。司教はシスターたちを祭壇まで導き、祝福をあたえたのである。マティルドは記した。「ザビエルが3世紀まえに十字架を立てたこの島に私たちはたどり着いたのです。その肖像が今、私たちのまえにあります。絵のなかの聖人はひざまづき、天を仰いで日本のために祈っていました」と。ミサが終わると朝食が用意された。そのあと司教はシスターたちが住むことになる家に案内した。それは丘の上、山手58番にある小さな家だった。ここから日本での生活が始まっていく。

フランス生まれのシスターたちがなぜ、はるかな東の果ての国まで来たのか。一生かけて携わろう

するその活動を支えたものは何か。サン・モール修道会の日本での活動をたどるまえに、そのことを少し時代をさかのぼってふりかえてみたい。

2. 近世フランスにおける孤児救済事業

宗教改革を経たヨーロッパでは、社会のなかで奉仕活動を行なう新しい修道会が現れた。中世からつづく修道会も慈善活動を行なってきたが、その活動の中心は俗世から離れたところで祈りの生活を送ることにあった。新しい修道会はむしろ俗世のただなかに立って宣教と教育と福祉を実践していくことをめざした。日本にキリスト教を伝えたイエズス会もそのひとつである。

新しい時代の教会の慈善活動はこれらの修道会が担うようになる。さらに修道士や修道女だけでなく、俗世で暮らす信者がこうした活動に参加していく。そうした動きを推進したひとりがヴァンサン・ド・ポール Vincent de Paul である。

ヴァンサンは1581年に西南フランスのランド地方の農家に生まれた。家畜の世話をしていた少年を教会が見いだして学費をまかなった。南仏の古都トゥールーズで神学をまなんで司祭になった。それから間もなく、乗っていた船が海賊に拉致され、チュニジアで奴隷として売りとばされた。捕らわれた者の悲惨さを身をもって知った彼は、2年後にそこを脱出したのち、囚人とその家族のために何ができるかを考えた。その思いはやがて苦しい境遇にいるあらゆる人々へ向けられていく。

ヴァンサンは貴族の家で家庭教師を勤めたことがある。そのとき裕福な人々に慈善に対する関心を呼び起こすことができた。これによって孤児院や養老院の設立資金を提供してもらうことも可能となる。多くの人に手をさしのべていくには、経済的な基盤を築いて救済組織を整えることが必要なときもある。

1617年に「愛徳同志会」Confréries de la Charité が設立された。名門貴族の婦人たちの協力ののもとに創られた組織である。これは修道会ではない。俗世に暮らす女性信者の会である。既婚でも未婚でも会員になれた。「貧しい人々のはしため」となることをめざしている。愛徳同志会の会則が定められた。めぐまれない人のためになすべき仕事、示さねばならない態度について細かい配慮が求められている。たとえば食事のときの条項には次のようにある⁽³⁾。

当番の婦人は会計係からその日に必要な食材を受け取り、これを調理して貧しい人や病気の人ののもとに運ぶ。笑顔で挨拶し、食卓を整える。ナプキンとスプーンと深皿を置き、手を洗うのを手伝う。食前の祈りを唱えるように促し、それからスープをよそって肉を切り分ける。すべてのことを神さまに対して行なうように愛をもって行なう。会則は次のように記す。「婦人が貧しい人々にした善い行ないは、神さまご自身にしたことなのである」と。食事を給仕するとき、いつもいっしょにいる集団がいたらその人たちから始める。ひとりきりでいる人がいたらその人を最後にする。そうすればその人の傍らに一番長くいることができるからである。

この会則は1617年、無原罪聖母の祝日である12月8日に発表された。それまで教会の慈善活動は聖職者が担っていた。しかしこの日から、どんな信者でも行なうことができる活動として明確に位置づけられることになったのである。

さまざまな階層の女性がヴァンサンのもとに集まった。牛飼いをしていた娘が地方から出てきた。

娘は何も持っていない。人につくしたいという一途な思いがあるだけだった。このけなげな娘の存在が、ヴァンサンを新しい方向に導くことになる。1633年に「愛徳姉妹会」Compagnie des Filles de la Charité が設立された。修道女が修道院に籠もることはもはや時代にそぐわない。一生を修道生活にささげる終生誓願は立てさせない。めぐまれない人への奉仕活動に献身することをひたすらめざすためである。

ヴァンサンは教会の福祉事業における在俗信者の役割を開拓した。また個々人の力だけでなく集団の力が有効であることにも目を向け、その力を組織化した。教会という枠を越えて、現代の社会福祉につながる道を切り開いたのである。

愛徳姉妹会ができたとき、最初にあった愛徳同志会の組織を改めて「愛徳婦人会」Compagnie des Dames de la Charité とした。フランス革命に先立つ時代である。貴族という立場でなければできない仕事もあった。おたがいが補いあって活動できるようにした。愛徳の女性によるふたつの会はそれから多くの事業に携わった。彼女たちがなすとげた功績のなかで、もっとも大きなもののひとつが孤児救済である。これは貧しい人を助けることにくらべてはるかに困難な仕事だった。とりわけ貴族の婦人たちはそれを身をもって知ることになる。

ヴァンサンがこの仕事に乗りだしたきっかけは次のように伝えられている⁽⁴⁾。

1638年のことである。ヴァンサンは仕事帰りに真夜中のパリの町を歩いていた。通りの隅でみすばらしい身なりの男が何かしている。見れば赤ん坊の手足を折ろうとしていた。不自由な体にして物乞いの道具にするつもりなのか。ヴァンサンは男から赤ん坊を奪った。抱きかかえたままサン・ランドリ通りにある施設に連れて行った。そこは「おむつの家」la Couche と呼ばれている。入ってみればまたもやヴァンサンは驚くべきものを目にした。何百人もの赤ん坊が詰めこまれ、世話をする女性は3人しかいない。お乳ももらえず、衰えきった赤ん坊をただ薬で眠らせているだけなのである。

ヴァンサンはすぐに愛徳婦人会に告げて支援を求めた。施設を訪れた貴族の婦人たちは悲嘆に暮れ、赤ん坊をすべて引き取りたいと考えた。しかしいくら善意があってもいっぺんには無理である。とりあえず家を一軒確保して引き取れるだけの子どもを保護し、乳母を雇って養うことにした。そこから始めて、わずかの数年のあいだに四千人ものみなし子を養うまでになった。しかしかかる費用はあまりにも膨大だった。寄附ではとてもまかないきれない。婦人たちは私財を投じ借金までしたが、もはやこの事業を断念するほかないと考えるまでになった。

ヴァンサンは婦人たちをまえに語った⁽⁵⁾。この仕事を継続するか放棄するか、それを決断するまえに思い返してほしい。あなたがたは数えきれないほどの小さな命を死から救い出し、キリストのめぐみのなかで育ててきた。あわれみと愛によってこの子たちを自分の子としてきた。「あなたがたはこの子たちの恩寵の母になったのではないか。この子たちが自然の母に捨てられてからそうしてきたのではないか」と。

ここでヴァンサンが語った「恩寵の母」*mères selon la grâce* とは何を意味するのか。— 信仰をもつ人々は考える。子どもは神のめぐみによって、つまり恩寵によってこの世に命をさずかるのだと。それは生まれてからあとも変わらない。神のめぐみのなかで子どもは育っていく。たとえ子を生んだ「自然の母」に捨てられたとしても、神のめぐみからはずれることはない。そのときこそ「恩寵の母」の腕のなかで育っていくのである。

この言葉に婦人たちはふたたびめざめた。万難を排してもつづけていかねばならない。あらためてそれを誓いあったのである。1647年のことだった。それから婦人たちはさらに多くの犠牲を払いながら、なおこの事業を遂行していった。ひとえに「恩寵の母」でありつづけるためだった。みなし子を抱きしめる「恩寵の母」がやがて世界中に現れた。白い被り物をかぶり黒い修道服に身をつつんだ愛徳姉妹会のシスターたちが活躍してきた。ヴァンサン没後、姉妹会は修道女会へと発展したのである。今では被り物の形や修道服の色は変わったが、その精神はずっと生きつづけている。

ヴァンサンによって築かれた愛徳の心と行ないは、のちにいくつもの活動的な修道会の誕生を促した。そのひとつがサン・モール修道会にほかならない。

1662年のことである。北フランスの古い町ルーアンの郊外で、バレ神父 Nicolas Barré が小さな学校を開いた。貧しい家の娘たちに無償で教育の機会をあたえるためである。バレ神父はミニミ修道会 Ordine dei Minimi に所属していた。これは15世紀にイタリアで創設された組織である。アッシジのフランチェスコの「小さな兄弟の会」Ordo Fratrum Minorum にならったもので、ミニミとはイタリア語で「もっとも小さな者たち」を意味する（日本ではバレ神父の母語であるフランス語でミニムと呼ぶことが多い）。

神父の学校に集まった娘たちはやがて共同生活をいとなみ、さまざまな奉仕活動に携わるようになる。神父はこう告げた。世間から見捨てられたもっとも小さな人々のうち、ただひとりを救うためであっても、「あたかも全世界を救うかのように力の限りをつくして取り組まねばならない」と⁽⁶⁾。必要とされる場所があればどんなところへも赴く。そのために修道女としての誓願を立てずに集団で暮らすことにした。これはヴァンサン・ド・ポールの愛徳姉妹会の精神に倣っている。

1666年に「幼きイエズスの愛徳教育修道会」Demoiselles de l'Instruction de l'Enfant-Jésus を名のつた（日本における現在の名称は「幼きイエス会」である）。その翌々年、パリのサン・モール通りに本拠を移した。ここから毎朝シスターたちが奉仕活動に出かけていく。町の人々は「サン・モールの姉妹たち」Sœurs de Saint Maur と呼んだ。これが会の通称となったのである。バレ神父はふたたび告げた⁽⁷⁾。「姉妹たちはあらゆるところに同じ情熱と同じ愛をもって出かけていく。神のみこころにすべてをゆだねて」と。

メール・マティルドが遠い東の果ての国に来たのも、そして異国の土となるまで教育と福祉の実践に携わったのも、出発点はここにあった。1852年にサン・モール修道会のシスターがマレーシアに派遣された。はじめての海外進出である。そこで貧しい子どもたちの養育施設を開き、バレ神父のめざした最初の試みをあらゆるところで実現しようとした。

3. 横浜におけるサン・モール修道会の活動

メール・マティルドの一行が日本へ来たのは、サン・モール修道会が海外派遣を始めてからちょうど20年後のことだった。

横浜の山手の丘の小さな家でシスターたちの生活が始まった。そこに落ちついて間もなく、居留地の外国人の子どもの世話をまかされるようになる。新しい住まいはたちまち子どもでいっぱいになった。マティルドはまえに引いた文章の最後に、次のように記している⁽⁸⁾。「いつの間にかイギリスと

アメリカの愛らしい娘が12人ばかり、私たちのもとに安らっています。私たちはしあわせです。希望に胸をふくらませています」と。

それ以上のことは書いていない。この娘たちは混血ではないか。西洋人と日本人（あるいはそのころすでに横浜にたくさんいた中国人）とのあいだにできた子かもしれない。なかには遺棄された子もいただろう。この小さな家で始まったことが、サン・モール修道会の日本における事業の発端になっていくのである。

日本に来て5か月後に修道会は山手58番に千坪の土地を借りることができた。横浜ではじめての孤児院が設立されることになる。そこは仁慈堂と名づけられた。土地の貸借にあたってはフランス領事がシスターの仕事を支援するために尽力したという⁽⁹⁾。いよいよ拡大していく孤児救済事業に向けて、マティルドは翌年いったんフランスに帰国した。修道院本部にシスターの増員と資金の調達を依頼するためである。12人のシスターをシンガポールまで伴い、4人を連れて横浜に戻ってきた。日本人の若い娘たちもここを手伝うことになった。

マティルドはさらに山手83番の土地を日本政府から借り受けた。のちに永代借地権を取得して宿舍と校舎を建設した。居留地に住む外国人子女の教育も引き受けたのである。そのときの名義は「佛国尼学舎」だった。佛国は^{フランス}佛蘭西。シスターは西洋の尼さんである。孤児350人と乳幼児80人を収容するまでになり、1875年（明治8年）に正式に孤児施設として認可された。

明治の日本では教育制度が徐々に整いつつあった。それでも一般の学校に通うことのできない子もいた。外国人が普通に町を歩いている大きな港町ではこれは容易に想像がつく。混血児への偏見が色濃かった時代である。西洋人の仲間入りはできない。日本人の仲間にも入れてもらえない。たとえ外国人が教えるところだとしても、ひとしく教育を受けることのできる場所が山手の丘の上にあったのである。

この年1875年、プティジャン司教は3度目のヨーロッパ歴訪を行ない、ローマ教皇ピオ9世に謁見した。布教活動の充実をはかるべく、日本の教会を南北に分割することを誓願した。翌年それが実現する。中部以西の南緯代牧区はプティジャンの管轄となり、大阪に司教座が置かれた。

北緯代牧区にはパリ外国宣教会のオズーフ神父 Pierre-Marie Osouf が司教として就任することになる。新しい司教は1876年（明治9年）7月に横浜に到着し、聖心聖堂で着座式を行なった。翌年、東京居留地に築地天主堂が完成したのに伴い、司教座はそこに移された。

パリ外国宣教会は築地天主堂のかたわらに附属の小学校を開設し、サン・モール修道会に助力を求めた。ここは童貞学校と呼ばれるようになる。生涯独身をつらぬくシスターが教える学校だからである。童貞学校には寄宿舍があり、居留地の捨て子が保護されていた。多くは西洋人との混血児である。居留地の周辺に住む貧しい家の子どもたちもいた。なかには良い地位の家の子もいた。それがみな寝食をともにしていたのである。

明治10年代になると築地居留地にはプロテスタントのミッション・スクールも次々と創られた。そこは西洋人の住宅が建ちならぶ界隈である。ピアノの音や讃美歌のコーラスが聞こえてくる。上流階級の婦人たちが稽古に通ってくるようになった。

東京におけるサン・モール修道会の活動のなかで、フランス語教育の比重が少しずつ大きくなっていく。赤坂葵町に雙葉会が創設された。華族や上流家庭が修道会を援助した。町名にちなんだ雙葉葵

が会の名の由来である。シスターたちは築地から葵町まで馬車に乗ってフランス語を教えに通った。サン・モール修道会はルイ王朝の時代にサン・シールにある貴族の名門校で教育に携わったこともある。バレ神父の教えに従い、シスターは必要とされるどんなところにも赴いた。それは貧しい人のもとであれ豊かな人のもとであれいささかも変わらない。

1899年(明治32年)に文部省は私立学校令を制定した。横浜のサン・モール修道会の学校は横浜紅蘭女学校として認可された。のちに学校法人の横浜雙葉学園に改称され、現在に至っている。東京の学校は雙葉高等女学校として認可され、千代田区六番町に移転して学校法人雙葉学園に改称された。このとき横浜にあるプロテスタントのミッション・スクールも認可を得ている。フェリス和英学校(現在のフェリス女学院、以下いずれも学校法人)、捜真女学校(捜真学院)、横浜英和女学校(横浜英和学院)、共立女学校(横浜共立学園)がそれである。カトリックは横浜紅蘭女学校がひとり先陣を切ってきた。

孤児養護施設の方は各種学校としての認可を得て董女学校となった。ここでは刺繍やレース編みなどの手芸も教えており、西洋人や日本人の商家に就職できるようにしたという。関東大震災後に東京に移り、太平洋戦争のとき閉鎖された。

メール・マティルドは93歳まで横浜サン・モール修道院長を務め、1911年(明治44年)に97歳の生涯を終えた。墓は横浜外人墓地にある。

4. 神戸におけるショファイユの幼きイエズス修道会の活動

サン・モール修道会について明治のはじめに来たのは、ショファイユの幼きイエズス修道会である。プティジャン神父の要請により1877年(明治10年)に4人のシスターが日本に派遣されてきた。

この修道会は1859年にシスター・アンティエ Reine Antier によって創立されている。フランス東部のブルゴーニュ地方にショファイユという小さな町がある。閉鎖されてひさしい女学校を再開するために、町の司祭は南フランスのル・ピュイ(現在のル・ピュイ・アン・ヴレ)にある幼きイエズス教育修道会に助力を求めた。その会のシスターだったレーヌが赴任してきて女学校を再開させた。町の織物工場で働く人のために託児所を開設し、訪問看護の手配も行なった。

レーヌのもとに集まった数人のシスターとともに、ル・ピュイから独立した新しい修道会が生まれた。それがショファイユの幼きイエズス修道会である。そのころ修道会専属の司祭となったのが若き日のプティジャン神父だった。わずか1年の滞在ののち、神父はパリ外国宣教会に入会するためショファイユを去った。しかしこのときのレーヌとの出会いが、のちにシスターの日本派遣へとつながっていくのである。

プティジャンはキリスト教禁制が解かれた翌々年の1875年(明治8年)に長崎からヨーロッパへ向かった。目的のひとつは、すでに述べた日本教区の南北分割を教皇に請願するためである。もうひとつはショファイユのシスター4人を日本に伴うことだった。一行は77年(明治10年)5月にナポリを出航した。

2か月にわたる船旅の途中、シスターたちはいくつかの寄港地で修道女会を訪問している⁽¹⁰⁾。シンガポールではサン・モール修道会を訪れた。ここで北緯代牧司教に任命されたばかりのオズーフ神

父に会っている。フランスの植民地だったコーチシナのサイゴン（現在のベトナム・ホーチミン市）ではシャルトル聖パウロ修道女会のシスターから歓迎を受けた。ここで児童養護の施設に案内されている。そのあと市内のカルメル会修道院（女子蹴足カルメル会）を訪れた。上海ではヴァンサン・ド・ポールの愛徳姉妹会を訪れた。ヨーロッパ式の病院を経営している。さらに煉獄援助姉妹会（現在は援助修道会と呼ばれる）を訪れた。ヨーロッパ人の子どもたちの寄宿学校を経営しており、そこには病院と孤児院もあった。こうしてアジア各地の修道女会の活動に接しつつ、シスターたちはこの年1877年7月に神戸に到着した。

「最初の子どもを4人とも、わくわくして待っています」— これは神戸からフランスの修道会本部に書き送った手紙の一文で、日付は1877年7月10日とある。日本の年号では明治10年にあたる。神戸に到着したのは前日の9日だった。子どもを待っている4人というのは、フランスの修道会本部から派遣された次のシスターたちである。

メール・ジュスティヌ Mère Justine 36歳

スール・サンテリー Sœur Saint Élie 28歳

スール・サン・フランソワ・ドゥ・ボルジア Sœur Saint François de Borgia 27歳

スール・ベルナルディーヌ Sœur Bernardine 23歳

このなかでジュスティヌは修道院長に任命されていたのでメールと呼ばれた。現在はシスターと同じ意味のスールと区別なく呼ぶところもある。

先ほどの文章をふくむ手紙は次のように記されている⁽¹¹⁾。「神戸の町に来るために汽船で世界半周の旅をしました。フランスを発ってから53日が過ぎました。フランスから五千里のところにいるということですが、そんなに遠く離れているようには思えません。私たちの心はいつもショファイユにあり、距離は感じません。同時に、ゆだねられた貧しい子どもたちを愛するために私たちは神戸にいる、ということも強く感じています。と申しますのは、到着して2日目の今晚、捨て子をひとり連れて来るといふ知らせがありました。私たちの事業への祝福であるこの最初の子どもを4人とも、わくわくして待っています。神さまがこの子どもを、つらいことも慰めもたくさんあった旅の報いとしておあたえくださった贈りものと思って愛しましょう」と。

メール・ジュスティヌは日本に着いてから頻繁に手紙を書き送っている。宛名はほとんどが修道院総長のアンティエである。受け取られた手紙はショファイユの修道院本部の記録保管所に収められており、その写しが宝塚市仁川にある日本管区本部の資料室にある。

シスターが手紙を本国に書き送るのは、ひとつには派遣されている者の義務としてだが、かならずしもそればかりではなかったろう。シスターたちの「母」ともいうべき総長に異国での困難な暮らしを告げて、慰めと励ましを求めている。「どうぞあなたのかわいそうな娘のためにお祈りください」と記した手紙もある。そしていつも総長からの返事を心待ちにしていた。

4人のシスターは2か月近い船旅を終えて神戸にたどり着くと、疲れをいやす間もなく仕事にとりかかった。そこに至るまでのいきさつは次のように伝えられている⁽¹²⁾。

1875年（明治8年）のことだった。ヴィリオン神父 Aimé Villion が神戸の生田神社の境内であわれな母親を見かけた。今にも死にそうな赤ん坊をかかえている。熱のある額を水でうるおすと、まもなく赤ん坊は母親の腕のなかでこときれたという。それがせめてもの洗礼の水となったのである。

神父は1868年（明治元年）にパリ外国宣教会から長崎に派遣され、3年後に神戸に赴任してきた。そのころ関西には飢饉がつづいており、貧しさのあまり捨て子があふれていた。当時は耶蘇教と呼ばれたキリスト教の神父が面倒を見てくれる。— そんなうわさがひろがった。教会のまえに子どもが置き去りにされるようになる。神父は子守歌をうたって子どもたちを寝かせた。ひもじくて泣かれると砂糖水をあたえた。けれども男の神父にはそれ以上のすべがない。横浜のサン・モール修道会に頼るほかなかった。多くの子どもが引き取られていった。神戸にもシスターに来てもらえたらと、神父はずっと願っていたのである。

シスターが最初にあずかったのは数え年4つ（今の満年齢では3歳）の女の子だった。まもなく生後2カ月の男の子が送られてきた。まだ夜具もゆりかごもない。持ってきた旅行カバンに自分たちの下着をつめて柔らかにした上に寝かせた。これは到着からほぼひと月後の8月8日付のメール・ジュスティヌの手紙に記されている⁽¹³⁾。

10月15日に神戸の外国人居留地の裏町41番に移転したとき、「センタンファンズと名づけられた子どもたちの家」が建てられたとある。センタンファンズは「聖なる御子」Saint Enfance を意味する。おさな子イエスのことである（現在のフランス語の発音ではサンタンファンズだが、日本ではずっとセンタンファンズと呼ばれてきたので、ここではそれに従いたい）。聖なる御子イエスに仕える心をもって子どもたちに接していく。そうして児童養護はもとより、保育や医療にかかわるさまざまな仕事に携わるのである。

子どもが毎日のようにシスターのもとへ連れて来られる。たちまち部屋が足りなくなった。建物に隣接する宣教会の倉庫を急いで改修しなければならない。宣教会が随分と出費してくれたので今年は何とかなるが、子どもの数がどんどん増えていくと、来年はまた拡張しなければならなくなるだろう。翌11月1日付の手紙にシスターは記している。「連れて来られる子ども全員を両手をひろげて受け入れられるよう、神さまが助けてくださいますように」と⁽¹⁴⁾。

年末には62人の子どもたちを育てている。日本に来て半年に満たない。はじめて暮らす国の習慣にもまだ慣れていない。言葉もほとんど通じないなかで、ひたすら子どもたちの養育に追われていたのである。

年が明けたころ、センタンファンズはいよいよ満杯になってしまった。1878年（明治11年）1月22日付の手紙がある⁽¹⁵⁾。今週は6人も断わるしかなかった。子どもの手を引いて遠ざかっていく母親の姿を見るのはどんなに苦しいことか。「その子を今度はどこへ連れて行くのでしょうか。どこへ売るのでしょうか。でも、どうすることができるといえるのでしょうか」とある。プティジャン司教は「入れなさい、もっと入れなさい」と励ましてくれる。そのころ大阪にいた司教はしばしば神戸のセンタンファンズを訪れている。資金を調達してくるだけではない。長崎に出張した帰りに、信者の娘ふたりを手伝いに連れてきたこともあった。

シスターは外国人なので当時は子どもの親権者にはなれない。長崎県の五島出身の下村鉄之助が多くの子を養子の籍に入れた。この人は隠れキリシタンの末裔で、ガスパル与作という名のカテキスタ（伝道士）だった。明治になって名を改めたのである。センタンファンズの管理人夫妻にも孤児の入籍を依頼した。

この年の主の公現の主日は1月6日であった。この日に神戸の教会で洗礼をさずかった人々がい

る。そのなかに目の見えない少女がいた。少女のことはメール・ジュスティヌがショファイユのメール・ユラリー Mère Eularie に書き送った手紙に記されている⁽¹⁶⁾。

8歳の女の子が連れて来られた。生まれつき目が見えないという。母親は6か月になる男の子を背負っている。子どもたちを育ててほしいと懇願した。シスターは見かねてふたりとも引き受けることにした。少女はとても賢そうだった。翌朝、子どもたちが朝の祈りを唱えるのを聞いて、運動場に連れて行ってほしいと言う。朝日に向かい、小さな両手をたたいて深々とお辞儀をしている。なんとも不憫な姿だった。翌日、また子どもたちの祈りを聞いていた少女は、自分にも祈りを教えてほしいと言った。シスターは喜んで教えてあげると、すぐに覚えてしまったという。

母親がはじめて面会に来た。少女はお祈りの言葉を唱えて聞かせ、今まで教えてもらったことをのこらず母親に話して聞かせた。母親は感激した。シスターは記している。「娘の祈りは早くも母親にめぐみをもたらしました」と。母親はそれから教会に来るようになった。今では洗礼を受けることを望んでいるという。ひとりの少女が救われただけではない。母親の心にも小さな灯がともされたのである。

子どもが親に捨てられるのは、病弱であったり障害をもっている子の場合が少なくなかった。この少女は誰よりも苦しんでいる。そして誰よりも信心深い。メール・ジュスティヌが愛情をそそいだその子が洗礼をさずかる日が来たのである。盲目の少女が手をひかれてプティジャン司教のまえに進み出た。司教は感激のあまり涙がとまらなかったという。

主の復活の主日（その年は4月21日）の手紙でメール・ジュスティヌは子どもたちのようすを伝えている。「みないい子で日々成長しています」とある。シスターは結婚しない。自分が子を産んで母親になることはないが、かえってそれだからこそ多くの子の母となることができるのである。シスターにとってセンタンファンスの子どもは何十人いてもいとしいわが子である。その成長を喜ぶ思いは、世のなかの母親といささかも変わりがなかったろう。

種痘を受けさせる日になった。「みな大声で泣き叫ぶでしょう」と手紙にある。大阪では幕末から種痘がおこなわれていた。全国で種痘の予防接種が法令化されるよりもずっと早く、関西では普及していたのである⁽¹⁷⁾。

センタンファンスに連れて来られた子にはまず洗礼を受けさせた。幼児の死亡率がきわめて高かった時代である。洗礼をさずかったものの、「数日後に神さまのみもとに帰っていきました」と記された子は少なくない。信者にとって洗礼を授かることは魂の救いのためになくてはならないことだった。子どもたちはこの世でたくさんのしあわせを得ることができなかった。せめてあの世でしあわせになってほしい。そうしたシスターの思いだったにちがいない。

5. 大阪と長崎における孤児救済施設の開設

「大きな町大阪で子どもが親から見捨てられたり、死ぬほどむごい目にあわされたり、売られたりしております」—メール・ジュスティヌがこの年1878年（明治11年）の11月5日に修道院総長に書き送った手紙にそう記されている。ショファイユでは大阪にも支部を開設することになった。

大阪にセンタンファンスができればシスターたちはふたりずつ別れて暮らすことになる。子育てに

あけくれる毎日である。日本語もままならない。四人だからなんとかやってこられたのだった。おもむく先は大都市である。「私たちに示される神のみ旨に喜んで従います。どんなにつらくとも、み旨にゆだねて、神のご計画に従うことができるよう主に祈っております」とある。

大阪からアンティエ総長に書き送った手紙には、日本に来てくれるシスターにはミシンが使えるように練習してきてほしいとある。こちらでは誰もできないので、使えたらかならず役に立つという。また、レース編みのできるシスターがいたら、必要なものを全部そろえて持ってきてほしいとも書いてある。レースならどんな小さなものでも日本で売れるという。それで子どもたちの養育資金がいくらかでも得られるのである。

1880年(明治13年)4月に待ちに待った3人のシスターが新たに日本にやって来た。応援部隊の到着である。その年の暮れに総長に書き送った手紙には、さっそく大阪でミシンを2台手に入れたことが記されている。シスターはセンタンファンズで手内職ができるようにした。子どもたちはいずれはひとりで生きていかねばならない。その日のための授産所の試みだった。

大阪には仕事がたくさんある。どれほどの収益があったのかわからないが、外部から人を雇うわけではないから、娘たちにしてもいくらかの稼ぎにはなっただろう。しかし「私たちの助けを必要とする子どもたちが多いのもここ大阪です」と手紙に記している。

プティジャン司教は1880年(明治13年)から長崎にいた。司教は長崎にもショファイユの修道会をむかえることを強く望んだ。そのことはメール・ジュスティヌがアンティエ総長に書き送った手紙にもくわしく記されている。「長崎方面には二万人以上の信者がいます。幾人かの若い女性たちがひとつの規律のもとに、信者でない子どもたちを救済しています」とある。これは岩永マキらが設立した浦上十字会のことである。のちにお告げのマリア修道会に改称された。

この年1880年(明治13年)の11月、メール・ジュスティヌはスール・サンテリーとともに長崎にやって来た。大阪から36時間の船旅だった。到着後はフランシスコ館と呼ばれる家にしばらく滞在した。プティジャン司教の所属するパリ外国宣教会の所有物件である。現在の長崎市南山手町12番にあたる。グラバー通りに面した建物で、のちに幼きイエズス修道会の清心修道院となった。

年が明けて1881年(明治14年)1月にシスターたちは長崎居留地の太浦5番に転居した。太浦海岸のすぐまえに位置する。もとは商品倉庫だという石造りの2階建てを購入したのである。内部を改装して長崎センタンファンズとして開設した。カテキスタを養成する修練院も併設された。これは長崎の信者の女性たちのための願いだった。

センタンファンズ開設から14年後に撮影された写真がある。2階建ての家の前庭にシスターとカテキスタと大勢の子どもたちが写っている。右下に1895という年号がある。シスターの救済活動は長崎においてもそこまで進展したのだった。1891年(明治24年)にはここに聖心女学校が設立された。フランス学校と呼ばれ、国籍を問わず寄宿できた(のちに清心女学校に改称した)。センタンファンズは98年(明治31年)に南山手町16番に移転した。戦後ここはマリア園と改称し、児童福祉法にもとづく養護施設として現在に至っている。

長崎における救済事業を軌道に乗せ、シスターたちは大阪へ戻ってきた。

1883年(明治16年)10月28日に総長アンティエに書き送った手紙がある。この月に大阪府による施設の視察を4回も受けた。当時センタンファンズは外国人居留地にあった。そこへ役人が訪ねてきた

のである。大阪に来たはじめは市中に暮らしていたが、夜中に泥棒に入られて番犬に毒まで盛られた。ふたりのシスターはそれから枕もとにピストルを置いて寝るようにしたという。宣教会も心配して外国人居留地に煉瓦造りの家を世話してくれた。そこは百人以上の子どもたちが暮らすことができる。夜も安心になったと記されている。

府の役人はこの建物のなかの教室、仕事場、食堂、寝室、病室にいたるまでくまなく見てまわった。特に保育室に興味をひかれたようだった。最後の視察のときは同行者が丁寧に接している「上品な方」がいたという。子どもたちの教育方法について尋ねられた。捨て子を救済するためになぜ遠くの国から来たのか、フランスの施設では子どもは何歳まで養育するのか、施設に要する多額の資金はどこから出るのかという質問もあった。

その2日後に大阪の新聞に「大阪府知事によるフランス人施設視察」という記事が出た。上品に見えた人は知事だったのだ。府がセンタンファンスをモデルにして同様に施設を設立する意向があると書いてあった⁽¹⁸⁾。新聞報道はシスターたちにとっていくらかプラスになることもあった。信者でない人のなかには、シスターが子どもを救うのではなく、金銭で取り引きしているのではないかと疑う人さえいた。そうした誤解が少しでも解消できたのである。

メール・ジュスティヌの手紙にはいつも余白に書き足しがある。この手紙はとりわけ多い。「耳の聞こえない人、口のきけない人の指導入門書を受け取りました」とある。センタンファンスには障害をもつ子ども大勢いた。口のきけない子が家に帰ったまま戻って来ない。シスターは心を砕いていた。そうした子どもたちに接するための指導書をフランスから取り寄せたのだった。孤児の救済施設がなかっただけではない。身障者や貧困者を救う手だてさえほとんどなかった。そうした時代のことである。文明開化からすでに10年以上が過ぎている。

この手紙が書かれた1883年10月28日、アンティエ総長がフランスの修道院本部において天に召された。日本にいるシスターがこのことを知ったのはその年の暮れのことだった。これ以降、メール・ジュスティヌの手紙はめっきり少なくなる。翌年にはシスターたちの「父」であったプティジャン司教も長崎で亡くなった。

メール・ジュスティヌは大阪で流行していた腸チフスにかかったことがある。なかまの手厚い看護で無事に回復することができた。そのとき、これで「私は日本人ばあさんになれるでしょう」と友人に書き送っている⁽¹⁹⁾。その後、児童福祉施設を京都と熊本に開設し、ついで教育施設を大阪と岡山と京都に開設した。日本にあること24年、数えきれないほど多くのみなし子の母でありつづけ、1901年（明治34年）に天に召された⁽²⁰⁾。

6. 函館におけるシャルトル聖パウロ修道女会の活動

日本に3番目に来たのはシャルトル聖パウロ修道女会のシスターである。オズーフ司教の要請で3人のフランス人シスターが派遣された。1878年（明治11年）にシスターたちは日本に到着し、函館に居場所を定めた。

この修道会はパリの南西にある小さな村から始まった。ショーヴェ神父 Louis Chauvet が村に赴任してきた。村人たちの暮らしは貧しく、教会の教えも知らずにいる。神父はまず村の娘たちに呼び

かけた。それに応えたのは十代の娘がふたりだけだった。ふたりは幼い子どもたちに読み書きや編み物を教えた。病人を見舞ったりもした。やがてそこに集まる娘の数も増えていき共同生活が始まる。1896年のことだった。

彼女たちの奉仕活動は徐々にひろがっていく。1708年には壮大な大聖堂で知られるシャルトルの町に本拠を移した。このときにシャルトル聖パウロ修道女会を名のった。南アメリカにあるフランス領ギアナで子どもの教育と病院の維持を受けもつことになり、4人のシスターが現地へ向かった。海外へむけた活動が開始されたのである。

日本に来たシスターたちは、修道女会ができたときと同じように学校と診療所を開いた。佛蘭西女学校（のちの函館白百合学園）と博愛医院のはじまりである。さらに身寄りのない子どもの養育にも携わった。明治のはじめの箱館戦争の巻き添えとなって親を失った子が大量にいたのである。

シスターたちの日本での最初の活動を知らせる手紙がある。修道女会の極東総監督であるメール・バンジャマン Mère Benjamin がフォルカード神父に書き送ったものである。かつて日本代牧を務めた神父である。このとき南フランスのエクス・アン・プロヴァンス大司教の地位にあった。那覇を去って30年以上になるが、日本の教会の発展を心にかけていた。

手紙は函館における孤児院の発足について伝えている⁽²¹⁾。シスターたちは日本に来て2カ月にしかならないが、すでに函館の人々に知られて親切にされているという。8人のみなし子と暮らしていた。もっとたくさん受け入れたいが、新しい建物ができるまではそれが精一杯だった。ここを管理しているマラン神父 Jean-Marie Marin は、資金さえあれば二千人を受け入れたいと語っている。

マラン神父はパリ外国宣教会からの派遣で1866年（慶応2年）に来日した。幕末にフランス人技師が招かれて横須賀に製鉄所が建設され、そこにできた「フランス村」の教会の司祭となったのである。つづいて横浜聖心聖堂の主任司祭を務め、1873年（明治6年）に函館の元町教会（現在のカトリック元町教会）に赴任した。シスターを迎えたのはその5年後である。

メール・バンジャマンの手紙はつづけて言う。函館の気候は北フランスとあまり変わらない。子どもの死亡率はむしろヨーロッパほど高くない。みなし子の受け入れができるようにするには、キリスト教徒の家庭の協力がぜひとも必要である。男の子は13歳になったら職人の信者の家に徒弟に出す。これは函館ではたやすいことだという。マラン神父が来たばかりのころ、信者は大工の一家しかなかったが、今は二百家族になっていた。

シスターは薬局も開いた。評判がよくて町はずれからも相談に来る人がいる。10日間でお客さんの数は倍以上に増えた。宣教師もその人たちに会って教会の教えを伝えることができる。こうして多くの人が洗礼を受けるようになったという。作業所も創った。働くことができないでいる女性を呼び集めた。訓練に励む娘はすでに12人になった。毎週のように新しい仲間を連れて来てくれる。学校には25人の生徒が通っている。そのうち3人は信者である。シスターだけでなく日本人の教師がふたり授業を担当している。「わずかのあいだに喜ばしい成果を約束できることがたくさんに増えました」—手紙はそう閉じられている。

3人のシスターが函館ではじめた仕事は今も途絶えることなく受けつがれている。さゆり園という乳児院がカトリック元町教会のかたわらにある。今の時代もさまざまな理由で家族が養育できない子どもがいる。その子たちをあずかる施設である。

やがてシャルトル聖パウロ修道女会はシスターを次々と派遣するようになる。東京に支部が設けられ、学校や病院や孤児院の設立にめざましい成果をあげていった。こうしたカトリックのシスターたちの献身的な活動が日本で再スタートした教会に活力をあたえた。教会の内側ばかりではない。教会の外でも児童養護のさまざまな局面で社会に貢献する存在となっていったのである。

注

- (1) 以上の記述について、詳細は次の拙著を参照していただければ幸いである。菊地章太『日本人とキリスト教の奇妙な関係』角川新書、KADOKAWA、2015。また、第2章以下の記述に関連して、ヨーロッパのキリスト教社会と孤児救済活動とのつながりについては次の拙著を参照されたい。菊地章太『ユダヤ教 キリスト教 イスラーム — 一神教の連関を解く』ちくま新書、筑摩書房、2013。
- (2) Francisque Marnas, *La religion de Jésus (Iaso ja-kyō) ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIX^e siècle*, II, Éditeurs Delhomme et Brigueuet, Paris, 1897, p.368. 邦訳は以下のものがある。久野桂一郎訳『日本キリスト教復活史』みすず書房、1985年。本稿の訳文はすべて原著から訳していく。
- (3) Pierre Coste (éd.), *Saint Vincent de Paul, correspondance, entretiens, documents*, XIII, Librairie le Coffre, Paris, 1924, p.427sq.; Sœur Elisabeth Charpy (éd.), *La compagnie des Filles de la Charité aux origines, Documents*, Compagnie des Filles de la Charité, Tours, 1989, p.6.
- (4) Ulysse Maynard, *Saint Vincent de Paul, sa vie, son temps, ses œuvres, son influence*, III, Bray et Retaux, Paris, nouv. éd., 1874, pp.400-402.
- (5) Coste (éd.), *op.cit.*, XIII, p.801; Coste, *Le grand siècle du grand Saint, Monsieur Vincent*, II, Desclée de Brouwer, Paris, 1931, p.472.
- (6) Nicolas Barré, *Œuvres complètes*, éd. Thérèse Darras et al., Les Éditions du Cerf, Paris, 1994, p.37.
- (7) *ibid.*, p.173.
- (8) Marnas, *op.cit.*, p.369.
- (9) 小河織衣『メール・マティルド—日本宣教とその生涯』有隣堂、1990、p.81。以下にマティルドの事業をたどるにあたり、小河織衣氏の著作に学ぶところが大きかった。
- (10) 相川ノブ子訳編『メール・ジュスティヌの書簡集』ショファイユの幼きイエズス修道会。2002, pp.6-11。相川シスターから筆者に寄せられた私信（2015年10月16日付）によれば、フランス郵船会社 Compagnie des Messageries Maritimes はこのときすでにマルセイユから横浜までアナディール号 Anadyr を就航させており、4人のシスターは5月20日にマルセイユで乗船し、ナポリでプティジャン司教と合流したのち、スエズ運河からインド洋をへて、東シナ海を航行した。一行は6月30日に上海で下船し、7月3日に日本郵船の西京丸に乗り換えて神戸に向かっている。NPO法人神戸外国人居留地研究会の調査では、7月9日の下船名簿にプティジャン司教と4人のシスターの記録があるという。相川シスターのご教示に感謝申しあげたい。なお、それから12年後の1889年来日したスール・サン・ティルデフォンスもほぼ同じ航路をたどった。以下に記録が収録されている。Sœur Saint-Ildephonse, “Description d’un voyage sur l’Anadyr de Marseille à Nagasaki”, Claude Durix, *De la Gaule au Japon par les chemins de Dieu*, Les Éditions du Cerf, Paris, 1999, pp.300-311.
- (11) 『メール・ジュスティヌの書簡集』前掲書、p.15。引用にあたって一部表記を改めた。以下にたどっていくことは、4人の活動をつづったショファイユの幼きイエズス修道会の村田初子シスターの著書にも学んだ。『無償の愛に生きて — 130年前のシスターの挑戦』講談社、2010。
- (12) Aimé Villion, *Cinquante ans d’apostolat au Japon*, Imprimerie de la Société des Missions Étrangères, Hong-kong, 1923, p.146.
- (13) Jean-Baptiste Chaillet, *Mgr. Petitjean (1829-1884) et la résurrection catholique du Japon au XIX^e siècle*,

chez Philippe Chaillet, Montceau-les-Mines, 1919, p.347.

(14) 『メール・ジュステイヌの書簡集』 前掲書、p.29.

(15) Chaillet, *op.cit.*, p.348.

(16) 『メール・ジュステイヌの書簡集』 前掲書、p.36sq.

(17) 同書、p.45、n.8.

(18) 相川シスターは当時大阪で発行されていたいくつかの新聞を調べたが該当する記事は見つからなかったという。同書、p.196、n.3.

(19) 同書、p.121.

(20) フランス本国のショファイユ修道院におけるメール・ジュステイヌの追悼記事は以下に収録されている。
Durix, *op.cit.*, pp.297-299.

(21) Marnas, *op.cit.*, p.371sq.

付記

本稿は2014年度東洋大学ライフデザイン学部プロジェクト研究「近世以降の日本における宗教的孤児救済思想とその実践に関する比較研究」における研究成果の一部である。研究代表者の菊池義昭先生、ならびに共同研究者の鈴木崇之先生と菅田理一先生からご指導とご助言をいただいた。記して感謝申しあげたい。筆者の分担課題「近代日本におけるカトリック教会の孤児救済活動」の研究成果は、2015年12月に『姿を変えたキリスト — みなし子を育てたシスターたち』と題して春風社から刊行された。刊行にあたりライフデザイン学部から出版助成をいただくことができた。学部教職員のみなさまに感謝申しあげたい。

L'aide sociale pour les orphelins à l'époque Meiji faite par les religieuses de l'Église catholique

KIKUCHI Noritaka

sommaire

L'Église romaine a accredité, pour la première fois, les prêtres des Missions Étrangères de Paris auprès du Japon au moment où l'on avait terminé la longue persécution contre les chrétiens. Sous les auspices de ces missionnaires, les religieuses catholiques se rendaient maintes reprises au pays de l'Extrême-Orient sans qu'elles osaient au temps jadis prendre part à l'évangélisation des Jésuites et d'autres ordres. L'aide sociale pour l'orphelinat a été menée au commencement de l'époque Meiji par les sœurs des trois congrégations dont le siège se situe en France, à savoir la Congrégation des Sœurs de l'Enfant-Jésus, dit les Sœurs de Saint Maur, la Congrégation des Sœurs de l'Enfant-Jésus de Chauffailles et la Congrégation des Sœurs de Saint Paul de Chartres.

Elles consacrent leur vie au secours des orphelins dans une terre étrangère. Ce qui constitue la base de leur cœur de miséricorde, ce serait nécessairement l'idéale de l'aide sociale formé dans un mouvement ecclésiastique à partir de la contre-réforme au XVI^e siècle en Europe. Des nouvelles communautés religieuses cherchent à atteindre l'exercice de la croyance et de la charité au milieu du monde profane, lequel devient, en effet, le point de départ pour les mères des enfants selon la grâce depuis que leurs mères selon la nature les ont abandonnés. Notre recherche aurait pour but de décrire ces actes des sœurs appartenues aux trois congrégations citées ci-dessus en suivant les sources européennes ainsi que les documents intérieurs de l'église, tandis que l'on ne fait point référence au témoignage contemporain au Japon, en conséquence tels sont les problèmes qui nous occuperont à l'avenir.

mots clefs: Église catholique, Sœurs de Saint Maur, Congrégation des Sœurs de l'Enfant-Jésus de Chauffailles, Congrégation des Sœurs de Saint Paul de Chartres, aide sociale pour l'orphelinat